

集落営農での小ギク省力化栽培の取り組み

東近江農業農村振興事務所農産普及課

【普及活動のねらい・対象】

近江八幡市田中江町営農組合では、昨年度から近江八幡市産地生産拡大プロジェクト事業で花きの生産拡大実証ほとして、水田を利用した小ギク栽培に取り組まれています。

小ギク栽培は労働時間の削減が組合の大きな課題となっているため、短期間で収穫可能な短茎栽培を基に自動化・機械化等を組み合わせ、省力栽培体系を実践出来るよう昨年度から支援を行っています。今年は雑草対策についてマルチ資材の効果を比較実証しました。

【普及活動の成果】

(1) 育苗～摘心

育苗段階での労力削減とリスク軽減を目的に、空きハウスに簡易ミスト室を設置してタイマーによる自動灌水を行うよう指導しました。また育苗後半の肥料切れを補うため、灌水時に液肥を自動施用しました。その結果、挿し芽での育苗は初めてながら90%以上の良苗作りができ、さらに摘心はヘッジトリマーを用いることで省力化できました。

(2) 定植～中間管理

ほ場準備はビニールマルチなし・畝立てなしとし、肥料も定植同時施用で省力化を目指しました。定植はキク専用定植機を用いて1条植えとしました。

昨年課題となった畝間の雑草対策は元肥を全層施肥から局地施肥に変えるとともに、管理機による中耕培土で対応しました。ただ株間の雑草は抑制できないことから、9月咲きでは麦類草生(リビングマルチ)や麦ワラ、稲ワラ、もみ殻等を株間に敷き、雑草抑制効果と作業性の検討をしました。これらの栽培方法により、定植から収穫までの作業時間を慣行の3分の1程度削減することができました。収穫は開花に合わせて採花し、販売は地元直売所で行いました。病虫害の発生もほとんどなく、品質も良好でした。

(3) 今年度の取り組みを振り返って

昨年一番問題になった生育期間中の雑草対策として、今回、9月咲き小ギクほ場で9種類のマルチ区を設置し、効果を比較検討しました。その結果、作業性やコスト、抑草効果は各種ワラマルチが有効でした。麦類草生(リビングマルチ)は、小ギクでは初めての試みであったことから、今後播種量や播種時期についても検討していく必要があります。これらのことから総合的に判断すると、敷きワラマルチが有効という結果になりました。

田中江町営農組合では、来年度以降も小ギク栽培を計画されています。営農組織で園芸品目の栽培を

するには、役割分担の明確化と効率的な適期作業が不可欠です。この取り組みが継続拡大するよう、当課では省力化技術確立とともに組織の運営についても引き続き支援していきます。



マルチを敷いて効果を検討